日本
ハンザキ研究所ニュース　2013(5)：通巻 No.89
発行２０１３年５月３１日
〒６７９－３３４１兵庫県朝来市生野町黒川２９２
Tel／Fax:０７９－６７９－２９３９
E-mail：info@hanzaki.net
URL：http://www.hanzaki.net
NPO 法人　日本ハンザキ研究所　栃本 武良

モリアオガエルの大量殺戮事件

モリアオガエルは水面に張り出した木の枝に白い泡巣を産み付けることで広く知られている。所によっては天然記念物に指定されているが、ハンザキ研の周辺ではシーズンになれば至る所に巣が多数観察できる。これまでも、当ニュースでは再々「いい加減な産卵生態」について書いてきた。典型的なのは池や水溜りの上に張り出している樹木の枝に産み付けられたものだろう。しかし、構内の“モリアオガエルの池”にはそのような木が無いし、周辺の水田では畔や石垣に白い帯のように見えるくらい沢山の卵が産み付けられる。同じような産卵生態のシュレーゲルアオガエルは、畔などの湿った柔らかい土の中に産み付ける。モリアオガエルのいい加減さに驚いていたのは私の無知なせいで、降った雨水と共にオタマジャクシは流れていくので、問題は無いように思う。

300 点に及ぶカエルの死体

大量のカエルの死体は、奥藤事務局長が田を見回り中に気づいて連絡してくれたのが発端だった。まだ、畔の総距離を測定していないが 5 面の水田周囲の畔にモリアオガエルの死体が転がっていたのである。産卵期真っ盛りで、死体の横でも産卵受精行動があちこちに見られた。死体の後肢に泡が付いたままのものもあった。二人で 200 点以上を拾い集めて持ち帰った。松井京大教授に聞くと、アライグマが遊び半分殺しをやるという報告があるとのことだった。無人カメラを仕掛けたがアナグマとタヌキしか写っていなかった。そして新たに一晩で殺された 70 点の死体が出た。カラスやタヌキ、アナグマに食われたものもあるだろうから 500 匹程が殺されたのではないかと思う。来年の産卵群はどうなるのか心配になってくる。当地では初めてのことなのだろうか、今まではどうだったのだろうか？

写真 1　体の一部が欠けているのは 10%だけ

写真 2　無人カメラにはタヌキ（右）とアナグマ（左）が

写真 3　お土産の中国ハンザキのグッズ

写真 4　再びガスったハンザキの幼生

写真 5　ハンザキ研のハンザキ・シール

写真 6　人見知りをしないアナグマのあくび

写真 7　第 1 回公開見学会の餌やり風景

写真 8　兵庫県内水面水産センター

写真 9　コウノトリの講演・大迫義人先生

写真 10　総会で市長のピンチヒッターの小島支所長さん

写真 11　カラスにやられたイモリのハンザキ死体

写真 12　刺身のつまのヤナギタデ

シーボルト研究の山口隆男先生のこと

私は熊本大学名誉教授の山口先生とは面識がないものの、長く賀状を頂いてきた。オランダのライデン国立自然史博物館には 42 回も出かけては、幕末にシーボルトが収集しオランダへ運んだ日本の動植物について分厚い膨大な報告書を刊行されてきた。これまでに植物や甲殻類・魚類についての印刷物をお送りいただいている。楽しみにして待ち望んでいた両生類・爬虫類についての粗稿の内、オオサンショウウオの部分は送っていただいていたのに、刊行されていない（？）のは残念なことだが 5 月 27 日に逝去されたということを、田口勇輝理事から伝えられた。田口さんは新婚旅行でライデン博物館に行った時に偶然に山口先生に出会ったという。

今年もいただいていた賀状には、これまでの刊行物とは別に成果をシリーズ本として動物について 4 冊、植物 3 冊を順次公開していく予定とありました。同級生や教え子の方の話ではほぼ原稿がまとめられているとのことなので、周辺の方々が何とか先生の遺志をついで刊行にこぎつけて頂ければ幸いだ。シーボルト研究の第一人者としての山口先生の業績を埋もれさせてはいけないと思います。

公開見学会の開始

平成 17 年に姫路市立水族館を退職し、旧・生野町立黒川小中学校跡を借用してハンザキ研の看板を揚げました。と言っても、資金力のない年金生活者である私には看板を作ることができなかったのです。そこに、産経新聞豊岡支局長であった谷下秀洋記者から資金協力の申し出があって実現したのでした。直径 5 ㌔の間には民家が無く、突然道路脇に出現したハンザキのシンボル像と大きな看板は目立ちました。このハンザキ研の見学はこれまでは原則いつでも受け入れてきました。まずは、ハンザキ研の存在を広く知って頂くためです。そして、ハンザキのことをできるだけ多くの方々に知って頂けるようにするのが、大切な役目であると考えてきました。そうなれば、夜行性で川の中で活動する人目に付かないマイナーではあるがビッグな存在のハンザキの保護と河川環境の保全に大いに有効だと考えてのことです。目印になるように大きな木彫のハンザキ 2 体は当時の竹村勲区長さんに作って頂きました。

年々の見学者数はどんどん増えてきました。来られる方は、自分の都合でそれぞれの時間で来ます。最初は昼食中でも中断してご案内してきましたが、見学者の大方は 11 時から 15 時に集中しています。一組の案内で 30 分から 2 時間もかかるのでは作業もなかなかやっている暇が無くなってきました。無人の廃校に年間数千人の人が出入りするようになったからです。平成 20 年には NPO 法人の許可を受けて、30 名ほどのスタッフ（役員・事務局員）がそろいました。私以外は皆さん現役で忙しい方ばかりですので、通常は私が一人で見学者の対応をしてきたのです。このままでは到底十分な応対ができなくなるということで、今月から毎月 1 回の公開見学会を実施することにしました。無論、学校などの団体の場合には予約の上で別途に応じています。

その結果ですが、5 月から 10 月の間では毎回 10～30 人ほどの見学者がありました。当法人のホームページを見たり道路際に設置した手作りの看板を見ての参加です。13 時 30 分～15 時 30 分くらいの間に、パワーポイントを使って生態について解説した後で、飼育中のハンザキを見て頂き、最後に餌やり体験をしてもらっています。初めは子供さん相手と考えていたのですが、やってみると大人も夢中になって何回も餌やり棒にアジを付けて挑戦しています。棒の先に針金を付けてアジを引っ掛けてハンザキの鼻先でふるわせると、パクッと大きな口を開いて丸呑みにします。その瞬間の振動が棒を伝って手に届きます。この感動はきっとその人たちに強い印象を与えることになるでしょう。また、時間を決めての集団見学会ですから、こちらの手間も省けますし、熱心な方々の参加が多く見られて大変効果的な方法だったようです。

県外からの参加者や、国外からも見学者があります。遠方の方は近くの民宿に泊まっての参加になりますが、我が法人のスタッフ黒田夫妻が 4 月にオープンさせた一棟貸し農家民宿“まるつね”では、庭先から目の前の川で夜間ハンザキを見ることができるということで大人気です。こんなハンザキの宿なんて他にはありませんよ！一度挑戦してみてください。

総会と公開講演会

ＮＰＯ法人としての大切なイベントが年に一度の総会です。昨年度の決算や今年度の予算と予定などを報告して承認を頂くセレモニー的な面も強いのですが、会員の皆さんにハンザキ研の整備状況を見て頂く事の方が大事だと思っています。今回も例年通り多次朝来市長を始め 30 数名の参加が予定されていたのですが、直前に発生した市内の山火事の陣頭指揮のため市長さんが欠席となってしまいました。市長祝辞は急きょ小島公明朝来市役所生野支所長さんにお願いしました。急なことで準備の無いままでしたが、色々おほめの言葉もいただき無事に会を進めることができました。また、地元生野町からの市会議員である渕本・能見両氏も多忙にもかかわらず出席していただきました。このように、朝来市行政を担われる方々の参加は、私どもの活動を高く評価して下さっているということを感じて嬉しいことです。300 名以上になった会員の皆様方も交通の不便な場所ですが、時々はご出席いただきたいと思います。

1 時間弱の総会だけでは、せっかく時間を割いて来ていただいてもそっけないことになりますので、続いて公開講演会を開催していますので会員以外の方も参加いただければと考えています。これまでは、私のハンザキの生態を始めとして、神戸市立須磨海浜水族園長の亀崎直樹（ウミガメ）博士、元滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員前畑政善（ナマズ）博士、環境省竹野シュノーケル・ビジターセンターの本庄四郎所長が専門のクモの話、今回はコウノトリの郷公園研究部長の大迫義人博士などとユニークな方々の講演がありました。

コウノトリでは兵庫県豊岡市が注目されています。日本最後の野生のコウノトリが全て捕獲された場所であることと復活作戦が始められ、現在自然界に放鳥されているからです。現在の所、70 羽以上が自然界に放され飛来した場所では大変なフィーバー振りになっているそうです。郷公園では 100 羽以上が飼育され各地の動物園などにも多くのコウノトリが飼育されています。しかし、この大型な鳥が多数日本の現在の環境で生き抜いていくためには、まだまだ難関があるようです。飼育場のコウノトリの餌の時間になると、放鳥個体たちが戻って来て食事をしているのです。これでは野生復帰では無くて単なる放し飼いの状態です。

コウノトリや新潟のトキと共にハンザキは国の特別天然記念物に指定されています。注目度の高い両鳥に比べるとハンザキは正に日蔭の動物です。悔し紛れに「コウノトリはロシアの、トキは中国の鳥で、外国の生き物を多額の税金を使って日本の生態系に放すのは良くないことではないか」と私は言ってきました。大迫先生にこの点についてお尋ねしたところ、コウノトリは渡り鳥であってロシアで繁殖していたものが、日本へも飛来していたものだそうです。日本の昔の標本と遺伝子は同じだから放鳥は問題が無いとのことでした。講演を機会にコウノトリの悪口を言うことができなくなってしまったということなのですが、この大きな鳥が日本の自然環境を再生させるシンボル的な存在であることは認めているところです。日本の空に美しいコウノトリが羽ばたき、河川には愛嬌者のハンザキがのんびりと暮らせる環境を護って行きたいものですね。

久しぶりにハンザキ・グッズ

・・・中国と米国・・・

岡田副理事長が 3 週間の中国・ハンザキの会議と調査から帰国したのは総会の 2 日前のことです。ロンドンの動物協会からの誘いで中国ハンザキの保護保全についての会議と生息地の調査をしてきたそうです。中国では昔は食材市場に並べられていたハンザキでしたが、今は第二種国家保護動物になっています。しかし、養殖が始められていてＦ2(孫）の代から食べてよいということだそうです。その一部は野生復帰させなくてはならないということですが、生息環境が良い状況にあるのかが問題になると思います。なにしろ、生息情報があった場所に行っても野生のハンザキを見つけることができなかったということだからです。もっともこれは食べるために密漁した後だったからかもしれないと、岡田さんは笑っていました。食べてしまっては見つけることは出来ないことで、そんな情報しか残されていないというのも困ったことです。

私はハンザキ・グッズのコレクターであるが、それは多くの人にハンザキへの興味・関心を引き起こさせたいという気持ちが強いからです。一昔前にはグロテスクな動物の代表であったハンザキも、最近ではなごみ・グッズになって注目を集めるようになりました。ハンザキ研の第二展示室（第一展示室は動物標本、第三にはキノコ標本が並んでおり、第四室では調査用具の工夫の歴史が収まっています。元の教室ごとにテーマを分けていますが手狭になってきました）には数百点にもなってしまったハンザキ・グッズが所狭しと展示されています。国内各地からのグッズがほとんどですが、今回は岡田さんのお土産で中国のものが加わりました。

中国ハンザキのバッジですが、私のコレクションも国際的になって来ました。アメリカの物もあって、これでオオサンショウウオ科全 3 種の物がそろいました。米国の物の中にすごい写真パネルがあります。ウシの餌である干し草を突き刺す大きなフォークのような道具で米国ハンザキを突き殺して駆除するスーツ姿の人々と、ずらりと並べられたハンザキの死体、そのかたわらでハンザキをさばいている人が写っています。河川の有用魚類を食い荒らす有害動物とされた時代があったということです。しかし、日中両国だけでなく米国でも食習慣があったことが分かる貴重なパネルです。プレゼントしてくれた米国人はハンザキがプリントされたティシャツや帽子、保護のキャンペーンのためのシールやバッジも一緒に頂いたのですが、これらのグッズなどの売り上げでハンザキの保護活動をしているのだそうです。その事実を必ず見学者に伝えて下さいというコメントもいただきました。シャツのデザインはいかにもアメリカらしい派手なハンザキの姿で、日本人の発想とはかけ離れたものになっています。アメリカでは 2 年ごとにヘルベンダー（アメリカ・ハンザキ）シンポジウムが行われているとのことですが、それだけ厳しい状況にあるのでしょう。日本でも同様ですが、何とか保護と環境の保全に役立ってほしいものです。

ハンザキ研日誌　　　　２０１３年５月

１日　産経新聞豊岡支局に谷下記者 3 年ぶりに復帰、早速取材に来所
４日　構内の河川ステーションに設置した防獣ネット 5 か所が咬み破られてシカの侵入
３日　岡田副理事長がチュウゴクハンザキの会議で中国へ、23 日まで
４日　初めての月例公開見学会実施、26 名参加あり
５日　奈良県の一家 4 名予約見学に
９日　ウエスコの山下氏、大阪府箕面川のハンザキ調査結果の報告に
１０日　兵庫県立大の三宅教授と学生 12 名来所
１１日　昨年 9 月に収容したハンザキの幼生が再び腹部にガスが発生
１５日　NPO の監査実施、大谷・堀内両監事来所
１７日　ハンザキ研のシール作製（写真 5）
１８日　のんきなアナグマの撮影（写真 6）
１９日　事務局会議 10 名出席
２１日　植物調査、前田常雄先生来所
２２日　キノコ調査、横山了爾先生・宇那木隆先生来所、ほとんど発生なし
２３日　・加古川漁協より 4 名来所
　　　　・生野学園 15 名見学に
　　　　・城崎マリンワールドの最大記録更新中のハンザキ死亡（全長 1505 ﾐﾘ、37 ｷﾛ）
２４日　田口理事夜間調査で 22 個体チェック
２５日　・第 5 回通常総会開催 31 名出席
　　　　・公開講演会コウノトリの郷公園の大迫義人先生
　　　　・岡田副理事長ほか夜間調査実施 14 個体チェック
２６日　山崎研究員ほか人工巣穴のチェック
２８日　兵庫県立福崎高校へ出前授業
３０日　・兵庫県内水面水産センター見学並びにニジマス幼魚 4,000 尾受領に
　　　　・水田 5 面の畔からモリアオガエルの死体 200 点収容
　　　　・ホームセンターで資材調達
３１日　前日の水田から 70 点のカエルの死体収容（トノサマガエル 3、アマガエル 1 以外はモリアオガエル）無人カメラにはアナグマとタヌキが写っていた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

モリアオガエルの大量殺戮の現場は衝撃的であった。アライグマが遊びで咬み殺すという報告があるという。野生の生き物がそんな悠長なことをするのだろうかとにわかには信じられない出来事だった。本当に今年初めての事件なのだろうか？